魅力度最下位、幸福度11位の茨城の実力

「きのうの朝食のおかずは何だった」。福島の知人にこんな質問をされたことがある。「それではおとといは覚えているかい」と追い打ちを掛けられた。正直、記憶は怪しかった。認知症の取り調べかといぶかったが、話の展開は違った。「私は覚えている」。きのうどころか、「１週間前だって覚えている」と勝ち誇ったような顔がのぞいた。

答えは「納豆」。毎朝欠かさないので、忘れるはずがないとのことだった。

納豆と言えば水戸である。他県の人も知る名産品の一つ。かつては駅の売店にお土産用としてわらに包まれた納豆がどっさり並んでいた。当然、消費量日本一かと思えば、さにあらず。県庁所在地と政令指定都市を対象とした総務省家計調査によると、１世帯あたりの年間納豆購入額でトップの常連は福島市である。近年では２０１４、１５年と首位、１６年は水戸市が奪還したが、１７年は再び福島に。水戸は盛岡市に次いで第３位に沈んだ。水戸市や製造業者は懸命にＰＲに努めているが福島の壁は厚い。毎朝欠かさない人もいれば、納豆汁など納豆を使った料理が多いというから、手強い相手だ。

納豆以上に厚い壁がある。民間調査会社が０９年から毎年行っている都道府県の魅力度調査だ。茨城県は４７位が定席。４６位になったことが１度だけあるが、常に最下位を走り続けている。県は知事を先頭に茨城の売り込みに躍起だ。今年４月の組織改編では民間企業並みに営業戦略部まで立ち上げた。茨城空港がありインバウンドにも力が入る。

だが、多くの県民はこの魅力度調査に首を傾げる。転勤で水戸に赴任してきた企業や中央官庁の幹部からは「茨城は食べ物や酒がうまいし、住みやすい。ゴルフ場もたくさんある」とおしなべて評判が良い。思えば、農業産出額は北海道に次いで全国２位。食べ物は豊富でメロン、栗、レンコン、干しいも、鶏卵など出荷量や産出額が全国一のものが数多くある。メロンは１世帯あたりの年間購入額でも１６年に水戸市が全国一となった。自慢は農作物や納豆ばかりではない。１人当たりの県民所得は全国４位となった実績を持つ実力県。科学の先端都市つくばだってある。筑波山や霞ケ浦周辺を回るサイクリングロード、国営ひたち海浜公園のネモフィラの花は最近の売りだ。

都道府県幸福度ランキングで今年、茨城は全国１１位に順位を上げた。観光的側面が強い魅力度調査に振り回されてきた県民は、大いに留飲を下げたことは言うまでもない。

茨城新聞社 常務取締役　井坂幸雄

丘を青色に染め上げる国営ひたち海浜公園のネモフィラ。外国人にも人気の的だ＝ひたちなか市馬渡